Bulletin of the Faculty of Education
The Department of Educational Psychology
1984, Vol. 31, 163 – 180.

ある精神分裂病者の心理療法過程

池田博和　　服部孝子[1)]

I　はじめに

精神分裂病の心理療法論に関しては，ここ10年以上の間にほとんど見るべきものはないといってもよいであろう。それは，1970年前後を境にして，中井（1984）もいうように，「精神科治療のモデルは，分裂病から謎めかしい『境界例』に変わっていった」からでもあろう。分裂病治療論のみならず，分裂病論一般自体が，70年代初頭のBlankenburg, W.（1971）の分裂病論にいわばとどめを刺し，それ以降はやはりこの線に沿う木村（1975，1981）の論議を除いては，低迷してしまっている観がある。

たしかに，対象関係論を理論的主軸に，性格障害として捉えようとする境界例の問題は，今日きわめて盛んに論議されるようになってはきた。しかし，この立場においては，分裂病問題自体はblack boxのままである。また，上にあげたBlankenburgや，その先達としてのBinswanger，L.（1957）の分裂病論も，むしろ境界例の文脈において見るべきであるという意見もある。現象面からだけいうならば，われわれもそのことにことさら異をとなえるものではないけれども，しかしながら，境界例概念の範囲をいたずらに拡大することは，今日すでにかなり混沌としている境界例概念をさらに混乱させるだけであって，あまり望ましい方向とはいえないであろう。むしろ，やはり人間学派によって到達された分裂病の本質論はひとつの支点として固定し，それとの共通性を境界例が，少なくともその中核と考えられる一群がもっているとするならば，そこからの延長として境界例における異同の問題が検討されるべきであろう。そうすることによって，今日蓄積されている境界例の心理療法経験から逆に分裂病問題に照射することも，あるいは混乱した境界例概念を整理することにもつながるのではないかと思われる。

こうした論議はともかくとしても，病院臨床の実践においては，依然として分裂病の心理療法は実際的課題となっている。しかしながら，現象学的人間学あるいは現存在分析的分裂病論は，心理療法論とは勿論，無関係ではないにしても，やはり本質論であってそれ自体が即心理療法論なのではない。従って，心理療法の領域にあっては，これらの優れた本質的知見をどう実践に生かしていくのか，それも抽象的論議ではなく，具体的に詳細な事例に即しての検討が課題となってきた。この方向の研究としては，ごく最近，藤田（1984）がこれを対人恐怖症の症例に関して「共通の基盤」という用語を用いて暗黙に援用しているが，分裂病者に関しては，十分とはいえないわれわれのもの（池田，1982）を除けば，他には見あたらないように思われる。そこで，本論ではさらにこの線に沿った検討を行っておくことにしたいと思う。

ここで取りあげる症例は，われわれ筆者のひとり，服部がすでに別の論文（服部・森田，1984）で紹介した事例であるが，そこでは母親を中心とした家族心理療法の展開過程に焦点がしぼられていたので，ここでは症例本人の心理療法過程を中心にまとめていくことにしたい。前論文と合わせてお読みいただければ幸いである。本事例の担当者は服部であり，池田はスーパーヴァイザーとしてともに検討を行なってきた結果として本論は成ったものであるが，文責はすべて池田にある。

II　症例の概要

症例：洋子　25歳の未婚女性，精神分裂病

彼女は地元の県立女子高校を卒業後，上京して幼少時からの念願を実現すべくあるバレエ団に入団し，「プリマ・バレリーナを目指して」練習に励んでいた。毎日はただレッスンのみの生活で，友人とのつきあいなどはほとんどなかったという。そのうちに彼女はそのバレエ団

1）刈谷病院専任心理臨床家，元研究生

の男の先生（女性主宰者の夫）に強い憧れを抱くようになっていった。しかし，上京後3年半ほどたった頃から，能動性の欠如，自閉的な生活態度，関係念慮，注察念慮等が目立つようになり，動作は緩慢で，食べたものを意図的に呕吐することにより体重も大きく減少したため，彼女は故郷に送り返され，精神科病院外来での治療を受けることになった。

この時の診断は「神経症」とされていた。1年半ののち軽快をみたが，この間に彼女は受洗している。23歳の春，彼女は再びもとのバレエ団に復帰したが，最初の上京時と同様に，この時もやはり，かなりの高揚気分のうちにあった。しばらくはよかったものの，やがてまた彼女は孤立的，自閉的となり，7カ月後にはバレエ団を退団せねばならなかった。その後も別のバレエ団でレッスンだけは受けていたが，精神状態は以前よりも悪化したものとなっていた。様子を見かねた下宿先からの連絡で彼女は郷里に連れ戻されたが，そのたびに家族のスキを見てまた上京してしまうのだった。彼女としては例の憧れの先生のことが頭から離れなかったらしい。こうしたことが何度も繰り返された結果，ついに彼女は以前と同じ病院に入院させられることになった。

入院時は緊張病性昏迷状態で，医師の質問にはまったく答えることはできなかった。ここでの診断は精神分裂病。この時期の状態像としては，妄想気分，妄想知覚，人物誤認，注察念慮，誇大的理想形成，恍惚性の感情興奮，至福体験等々があとから明らかとなった。これらはかなり非定型精神病的病像に近い状態像にも見えるが，後述する生活歴や基本的存在様式からすれば，やはり精神分裂病と診断されるのが最も妥当であると思われる。

Ⅲ　家族歴

彼女の家族は次の通りである。父親（60歳）はある商社に定年退職後も嘱託として勤めている。大柄で立派な体格をした律義で頑固な人。仕事上は有能で多忙，家族のことにはあまり関心をはらってこなかった。継母，佐智（50歳）は従順で素直，周囲に合わせ，人に悪い印象を与えないように気をつかう人である。兄（32歳）は高卒，会社員，仕事も家庭も要領よく割り切って過ごしている。兄嫁（30歳）は商家の娘で，控え目だがしっかり者。伯母（父の姉，70歳）は現在も保険会社の嘱託をしており，いかにも保険の外交員というタイプ。男性的で行動的。世渡りにたけている。男まさりの竹を割ったような性格で，愚痴などはいったことがない。言葉でいうより先に行動でやってしまうという人である。洋子を含め，以上の6人からこの家族は成っている。

洋子の実母は，洋子を出産したあと，産後の肥立ちが悪く，病床に臥していたが，洋子が8カ月の時に電車に飛び込み自殺している。29歳の時であった。原因は不詳ながら，非定型精神病圏の精神状態ではなかったかと推測される。この実母の母親も実母を出産した直後に死亡しているとのことである。実母は僧職の家の生まれで，体は丈夫ではなかったが，理知的な人であったらしい。

洋子の父親は，農家の8人同胞の末子として生まれ，家族に可愛がられ，甘やかされて育った。この家族は古くからの地つきの家柄であるため世間体には過敏で，そうした面での出費は惜しまないが，他方で「働かざるもの食うべからず」といった実質的，現実的な価値観に支配されている。父も伯母もそうした生活第一主義の家風を代表する人であるが，その金銭感覚にはどこか不均衡なところがある。継母は今もまだ家計をまかされていないという一方で，父親は貯金をはたいてまで長男の生活費を出しているという。それほど体が丈夫ではなく畑仕事や出勤のできない継母は，発言権もなく一人前に扱われてはこなかった。しかし，洋子と兄は特別で「早くに実母を亡くした可哀想な子ども」として家事等の手伝いは一切させられていない。「そんなことをしたら世間様に笑われる」というのが伯母の口癖であった。

実母の死後，父親は洋子が保育園児の頃に，現在の継母とは別の女性と再婚した。彼女は気の強い勝気な性格で家庭内のもめごとが絶えず，結局2年もたたぬうちに離婚となった。

現在の2度目の継母，佐智は洋子が小学校3年生の時に，34歳で東京から嫁いできた。彼女もまた，幼くして母親を亡くしており，その父親の再婚後は祖母のもとで19歳まで暮らし，その後は父のもとに戻ったが，きつい性格の継母の機嫌をうかがいつつ，3人の異母弟妹の子守りをさせられ，暗い毎日であったという。のちに父は離婚し，妹ふたりは母親に，佐智と弟は父親に引き取られた。佐智は代理主婦として弟や病弱な父の世話をするなかで30代半ばまで婚期を逸していた。佐智の異母弟が洋子のいう「東京の叔父」で，その妻れい子は洋子が高校時代以降，崇拝し讃美していた人である。

佐智は配慮的な優しい人柄であるだけに，卒直にふたりの子どもの母親になることを楽しみに嫁いできた。当時高校生であった洋子の兄は，佐智を歓迎し甘え慕ったが，洋子は伯母と密着的な状態のうちにあり，佐智の介入する隔はなかった。夫と伯母の関係も姉弟というよりは，実質的には親子に近く，彼女は主婦としての座を与えられないままふたりに追随し，いつしか20年の忍従の歳月がたっていた。

Ⅳ　生活歴

洋子はきわめて元気な赤ん坊であった。生母が死亡したのち，洋子の兄は父親と祖母によって育てられたが，洋子の養育は伯母に託された。伯母はかって結婚し妊娠もしたが，結局産まずに離婚している。彼女は27歳になってから看護学校に入学し，資格を得て病院に勤務した。その頃知り合った食堂経営者に店の経営を頼まれ，住み込みで働いていたが，洋子を託されたのはこの頃であった。3歳の頃まではこうして伯母とのふたり暮らしであったが，その後，伯母の援助によって建て直した父の家に移り，そこで父，兄，洋子，伯母の4人の生活が始まった。この時，伯母は食堂をやめ，現在の保険会社に入社した。定年退職後，嘱託となった現在でも，伯母には相当の収入があり，その経済力には家中の誰もかなわないという。彼女は休日は休日で寸暇を惜しむように田畑の耕作に精を出している。洋子はこの伯母を代理母親として「ちゃあちゃん」と呼んで成長した。伯母は洋子とつねに同じ蒲団で寝起きをして過保護的に可愛がり，「洋子はそこら辺の普通の子とは違うんだ」といって特別扱いをしていた。洋子が父親たちと同居した3歳の頃に，バレエを習わされようとしたのも，このような伯母の特別意識のあらわれであった。洋子はこのバレエのレッスンに初めて行った時の様子をよく覚えている。教室で彼女は小用を足したくなったが，そこのトイレには入れず，一度しか通ったことのない長い道のりをひとりで家まで帰ってきたという。その途中，白い服を着た顔の黒い人が曲がり角に立っていて，「道はこっちだよ」と指し示してくれた。それはのちには「神かキリストのような人ではなかったか」として妄想追想されている。ともかく洋子は一度もお漏らしなどしたことのない子であった。家族以外の他者との共通の場においては，排泄という当然の生理的機能が，洋子にあってはすでにこんな頃からかなりの緊張感を伴うものとなっていたということ，いいかえれば，洋子は身体的物質的次元での日常性，自明性のうちに安住することが幼い頃から狭隘化されていたということができよう。伯母は上記の一件があって，危険なため，洋子にバレエを習わせることを一時断念せねならなかった。

洋子が保育園児の頃に，最初の継母がきたが，洋子は彼女になつかなかった。父親も洋子には無関心であったし，兄とも7歳違うためかあまり接触はなく，洋子は隣の本家に行ったりして，伯母の帰りを待っていた。この最初の継母との生活の折，いろいろないざこざから伯母・洋子と，父親・継母・兄とが別居する話が出たこともあった。これをあとから聞いた洋子は，「その時，父は自分を見捨てたのだ」と思ったという。父との関係はずっと稀薄なものであり，「小学生の頃，父に甘えていくと振り払われた。一度だけ海水浴に連れて行ってもらったことは覚えているが，あとは新聞を読んでいる父の後姿しか記憶がない」と洋子は述べている。

洋子が小学校3年生の時に嫁いできた佐智も，夫から「洋子のことは伯母に任せておけばよい」といわれていたし，実際，洋子は伯母のいわば宝物で，容易には手の出せない存在であった。洋子もまた素気なく甘えてくる風でもなかったので，佐智は洋子に自分の子どもとしてかかわることはできなかった。

洋子は誰に対しても甘えを示さず，表出った反抗期もなく，体格がよくスポーツ万能で，「男の子よりも強くて，むかう敵はいなかった」。成績も一貫して優秀で，中学の時には県の健康優良児にも選ばれている。

しかし，友人関係の面では，年上の子に世話されるか，年下の子を従えているかで，同年輩の子とはうまくやれず，遠足の時などグループを作らなければならない時には，どのグループにも入りそこねて取り残されてしまうという風であった。ただ，弱い子がいじめられていると，そのいじめっ子を負かしたりするので，弱い子からは人気があったともいう。

中学の頃は，友人はいたが，それは向こうから求められて受動的にできたもので，普通は気軽には友達ができなかった。相手がはっきりと上か下でないと，自分の立場が取りにくく，級友との何でもない「井戸端会議のような人間関係は苦手であった」と自ら語っている。

そのため，小学校2年の時から再び習い続けたバレエに洋子はますます専念し，「学校，バレエ，帰宅して伯母と寝る」というだけの生活になっていた。こうして同年輩の友人との相互交流の体験に乏しく，年齢相応の生活感覚や精神性の発達を獲得する機会を逸していたのではあったが，彼女はそうした部分は知性化で補ない孤高を持して，どんな時も毅然として，決して自分の弱さを見せることのない子であった。伯母の眼には洋子はまさに期待通りの非の打ちどころのない娘として成長していた。

高校時代から洋子は，本格的なバレリーナになることを志していたが，それには，東京にいる佐智の異母弟の妻，れい子の生き方が大きく影響していた。れい子は本格的なバイオリニストを目指し，超俗的な生き方をしている人であり，洋子はこの義理の叔母を完全に理想化していたのであった。そして洋子は実力を試したいといって卒業後，東京に出た。この頃はかなりの高揚気分を伴なっており，卒業が待ち遠しくて仕方がなく，卒業と同時に不安などはまったく感ずることもなしに，「意気揚々として」上京したという。

「他の団員はおおいに遊び，恋し，学ぶことをうまくやっていた，でも私は他のことをすると，バレエがおろそかになるように思えて，遊ぶことはできなかった」と述べているように，当時，彼女はひたすらレッスンに熱中していた。このあと，前述のように3年半後に発病し，1年半の通院療養をせねばならなかった。この間に彼女は洗礼を受けているが，キリスト教と最初に出会ったのは東京での下宿生活においてであった。その家庭は代々クリスチャンであり，いわば使命として何人かの下宿生をあずかって食事つきの世話をしており，毎朝の礼拝が日課となっていた。洋子はそれに何か感ずるものがあったという。しかし，当時はとにかくバレエに夢中でそれ以上に関心が深まることはなかったが，帰省して療養中にたまたま教会案内のビラを見た時，洋子は自分が神から呼ばれていると直感したのであった。

こうして次第に気分が高揚しだし，意欲も湧いてくると，洋子は「このまま田舎町で自分の才能を埋もらせておくことはできない。私には亡くなった母と神様がついているから大丈夫」といって伯母を説きふせ，再び「日の出の気分で」上京した。この頃は何を見ても，何をしても楽しくて仕用がなかったという。

バレエ団に復帰後しばらくは，この勢いに乗ってバレエのテクニックは周囲が驚ろくほど上達したともいう。「バレエで汗を流して努力すると，心身ともに清められる感じがして，そのように自分をコントロールして，どこまでも高く高く昇っていきたいと思っていた。そうして高く昇っていく時，自分の力以上のものが働いているように思った」「皆とコンタクトが取れない時，自分は特別な存在で才能があるように思え，考えることが飛躍して英国へ留学したいなどとエスカレートしてしまった」「教会はこの世の楽しみでないものを求め，バレエは自分の楽しみのためのものだから，信仰を取るべきかバレエを取るべきか迷ってしまった。冗談にいわれたことと本気でいわれたことの区別がわからず間違って取ったり，キリスト教でいう比喩とかたとえ話がわからず，混乱してしまった」と洋子はあとからこの頃をふり返って述べている。やがてこうした傾向が，妄想気分，人物誤認，超越的至福体験となり，錯乱状態となって入院へと至ることになったのであった。

V　心理療法過程

1　第一期：「家族にまつわる混乱」（初回面接から第14回面接まで）

入院から2週間たって，洋子の病像も一応の落ち着きをとり戻した6月の初旬，病棟内の一室で私（以下，服部のこと）は洋子と初回の面接を行なった。洋子は背筋をしゃんと伸ばし，一点を見つめたまま座っていた。いかにもバレリーナらしく，クセのない髪を肩まで垂らし姿勢を正して端座した彼女のスラリとした姿体には，容易に人を寄せつけない雰囲気が漂っていた。彼女はその冷たい仮面様の表情をほとんど動かそうとはしなかった。私は簡単に自己紹介したあと，そっと語りかけてみた。

＜先日，お母さんと伯母さんにお会いしましたよ＞

「あの人のことは母とも思わないんです」

（彼女はキッパリとした口調で答えた。まるでその話はしたくないというかのようであったので，私は話題を変えて問いかけた。）

＜今はどんな気持なのかしら？＞

「バレエ，それだけを考えています。東京の下宿は音がうるさくて気が休まりませんでしたから，今度はマンションを買ってしまうのがよいと思っています。所属するバレエ団と住まいを早く決めたいのです」

＜そう，でも家族の方は，あなたが東京に戻ることについては反対のようですね＞

「反対はしてますが，私が行くといえば，行けないことはありません。病院としては今後，どれくらいの入院が必要だと考えているのですか」

＜今，初めてお会いしたばかりですから，いつというはっきりしたことは，私にもわかりません。ここで私のいえることは，この入院を機に病気のことも含めてあなたの生き方について，あなた自身にも家族の方たちにも改めて見つめ直してほしいということです。そのためのお手伝いを私はしていきたいと思っています＞

「わかりました。お願いします」

こうして今後，毎週一回，面接の時間を持つことが約束された。私は洋子の気ぐらいの高い硬い態度に，毀れやすいガラス細工のような脆弱さを感じながら，彼女を傷つけないよう十分に配慮してこの心理療法に取り組んでいかなければならないと思った。2回目は心身の休息を取っているかのようで，あまり話題は展開しなかった。3回目から徐々に心の内が吐露され始め，「将来が不安，バレエに専念したい，今までの練習の成果を劇場でやる時期にきている，いいバレエをやるには自分自身の精神を鍛えていかなければならない」と語られた。6月下旬の第4回面接では，彼女は初めて涙ぐみながら，問わず語りに次々と流れるように湧いてくる「家族」についての想いを語った。

「本当に生きていく自信がありません。亡くなった母が生きていてくれたら（嗚咽する）。家族をこんなにも

遠いと感じなかったかもしれません。母が自殺する前に，父がもっとよく母を見ていればよかったのに……。

私も母の亡くなった年齢に近づいています。私も母と同じような運命を辿るようになるのではないでしょうか。なぜ母は死んだのでしょう。父は私の養育について伯母にまかせっきり。途中から母になった人を本当の母と思えるものでしょうか。今の母は母としてもの足りない。伯母がいるし，私に母はいらなかった。でも父には必要でした。伯母が可愛がってくれましたけど，躾てはくれませんでした。本能的な可愛がり方で，理性というものがない。感情だけで操作されていくのは恐ろしいことだと思います。伯母にとって私は多分，生きがいです。今でも伯母は私と一心同体のようにいいますけど，それは伯母の満足であって，私の満足ではありません。私にとって伯母は母そのものではなかったのです。いつも母親を捜していたような気がします。〝家〟というものの意味がわかりません。あそこの家にいるのが恐いのです。それがこれからの不安につながっています。このままでは破滅しかありません。子どもの頃の私の本当の望みは，父母がいてバレエのある生活だったのです。そういう体験をしていないので，今，家庭というものに対する憧憬と崩壊への恐怖の両方があるのです」

洋子は流れる涙をぬぐおうともせず，幼な子のように泣き続けた。以後，このテーマは毎回のように涙とともに語られた。洋子は常に伯母にかかえこまれるように可愛がられていた。それなのに「いつも淋しさがあり，小学生の頃から空を見上げて，人は死んだらどうなるのだろう」と考えたりしていたという。洋子はいつも本当の母なるものを希求し続けていた。

洋子にとって佐智は，単に気がいいだけで無能力な居候として関心の対象外にあり，伯母は呑みこまれる不安を換起する拒否されるべき存在になっていた。他方で実母の像はあくまでも理想化され，洋子の「存在論的不安定さ」を唯一，支えるよすがとなっていた。それだけに，29歳で自殺した実母の年齢に近づきつつあることは，実母と同じ宿命に終る可能性を予感させ，彼女を不安におののかせるのだった。「亡くなった母の問題が片付いていないので，迷ってしまうのです。どうしてもそこから抜けきれず，生きていく自信がありません。実母は別人ではなくて，私の中で一緒にいるような感じです」という。私は実母とあなたとは別々の人間だから人生もまた別なのだ，とリアリティを追求し整理させることに務めた。そのあとで今いる継母を見直させ真の母と子としての出会いを体験させたいと思った。そのため，この頃から母親面接も並行して実施することにした。それからほどなくして，その佐智について，洋子は次のように語るようになった。

「生母の問題は，先生とお話ししてもう済みました。今の母といるとホッとします。楽天的というか……。母とは今，やり直している気がします。私は我ままで母を傷つけてきました。いつも間に伯母がいるという感じでした。私は誰についたらいいのかわからなかったんです」

このような形で面接は展開していき，洋子は自分自身に対しても少しずつ目をむけるようになっていった。

「私には何か基本的なものが欠けています。ずっと前からそう思っていました。何を始めても最後がわからない。ここまでできて，あとは無理だということがわからない。ここにくる前もとても不安でした。ただバレエのレッスンをしている時は安心でした。バレエのレッスンをやって汗を流して努力していると，心身ともに清められる感じがしたのです。バレエと教会によって自分が練り鍛えられていると思っていましたが，それは錯覚だったのでしょうか。私はこれからどうなっていくのでしょう。バレエの夢をよく見ます」

そこで，私は「夢もあなたの一部だから大事にしたい，忘れないように書いておくといいですね」と対応すると，次回からは必ず夢の記録を持参するようになった。いずれも断片的なものであり，私もとくに「夢分析」としては取り扱わなかったので，連想も取らなかったが，この頃の夢には次のようにどこにも立脚点を見い出せず，心細く頼りなげな不安な彼女の気持がよく表わされている。

【夢1】トウシューズを捜す。はき心地はよいが，充分はきならしていないから心配。片足のトウシューズのひもが短い。

【夢2】家へ帰れない。プッシュホンの複雑な電話。百円玉を何個入れても電話がかからない。お金が少ししかなくなってくる。

【夢3】トイレを捜しに行く。トイレに落っこちる。下着の替えがない。

【夢4】授業で他の生徒にわかったことが，私にはわからなかった。

2　第二期：「バレエをめぐる葛藤」（第15回面接から第40回面接まで）

8月に入ると初めての外泊が許可された。病棟生活においては，院内行事の運動会で女子病棟のアトラクションの出しもののダンスを他患者に教えたり，オセロゲームに

興じている姿も見られるようになり，現実適応は十分できるようになっていた。しかし，外泊は必ずしもうまくはいかなかった。無気力，過食，寝てばかり，それでいて不安感は強く心身ともに不安定で吐いたり下痢したりして，憔悴しきって帰宅するのが常だった。その心境を洋子は次のように語った。

「帰る前は嬉しかった。家では何をしてよいかわからず，食べて寝て，それでいて不安でした。伯母はもう干渉しないと草刈りをしていましたが，伯母のカマの音を聞くと，自分が赤ん坊で何もできないまま寝かされているというような連想が湧きました。

家族の誰とも遠い。家では私だけが浮いているんです。伯母はひとりでやっているし，父母，兄夫婦というまとまり方。母に対しても小学3年生の時から，ずっといっしょにいたんだという感じがしません。父のことはわかりません。外泊してもうまくいかないのは家が嫌いだからです。家族とはもう接近したくありません。私はもう家を出るべき時期だと思います。仕事を見つけて，早く一人前の社会人になって自立したいんです。病院にいても充実した日が送れないから，早く退院したい……。まだ退院は早すぎるかもしれないけど」

実際，佐智によれば，洋子は子供の頃から，いつだってどこに居たって，つねにひとりだけ浮いていたという。バレエの発表会の時なども，他の子は母と子でワイワイお喋りをしながらやっているのに，洋子はひとりで何もいわずに黙々と仕度をしており，母は取りつくシマもなかったという。

8月のある日の面接で，洋子は次のように述べた。

「外泊中はここで考えていた通りにはいかず，崩れてしまいました。すごく食べて寝て，そうしていると不安でまたやけ食い。自分がない。つかみ所がないんです。病院から帰る時は，自分の気に入ったように荷物を片づけて，何か仕事を始める準備しようかと思っていたのに……。ただ時を過ごすというのは嫌です」

＜やけ食いといえば，病院を出る時から，すでにちょっと食べ過ぎてたみたいね＞（私は，「自分がない，慢然と時を過ごせない」という話は受けず，生活上の話題の方に焦点を当てた）

「自分で作って，自分で食べたい。ひとりで暮らしたいんです。他の人はみんなそうやって，普通に生活できているのに，どうして私はできないのかと思います」

＜まずは今の家の人になることが大事なのではないかしら。家で居場所を見つけること。それができてはじめて，仕事を捜してやっていくことに応用できると思うの。あなたが今やろうと思っていることは，焦って階段を10段も一度に飛び下りようとしているように見えるわ＞

「こんな状態で，人間的に後退していないでしょうか。自分を狭い方へ狭い方へと追いやっている感じです」

＜そんなことはないと思うわ。あなたがいったように，他の人がやっている普通の生活ができるということが大事だと思うの。でも，それはあなたにとって大仕事だものね。しんどいのはあたり前だと思う。それは夢にもよく現われていると思うわ＞

「家では滅茶苦茶になってしまうんですけど，こんな自分でもいいんですね」（と洋子はホッとしたように，嬉しそうな微笑みを浮かべた）

次にこの頃の夢について，簡単にまとめておくことにしたい。ここでは伯母との訣別と同時に，父母と洋子の親子関係，家族の再建される方向性が示されている。また，ここでも「トイレ」と「下着」の主題が出現しているが，内容は変化してきているのが見てとれる。

【夢5】父母と伯母，私の4人がいっしょに車に乗っている。降りたら繁華街に迷い込んで，ヤクザにねらわれる。4人ともバラバラになり，伯母がいなくなる。（7月末）

【夢6】伯母がオートバイに乗っており，その後に私が乗っている。2台のバスの間にはさまれそうになり，伯母から逃げ教会に入る。（8月）

【夢7】家をこわす。コンクリートでしっかりした家ができそう。（8月）

【夢8】トイレが新しくなった。だが狭い。

【夢9】食事中，電話だと呼ばれたがはっきりせず，下着のまま帰ってきた。

【夢10】父母と私の3人で旅行する（12月）

家庭では，伯母は何もいわなくても，その存在自体が彼女を脅やかすものであった。ましてや，父や伯母が何かいおうものなら，洋子はたちまち不穏な状態となり，テーブルを引っくり返したり，夜中に「死んでやる」と家を飛び出すなどの行動化に及んでいた。母には「気持が地獄のようだ，電車に身を投げ出したい」などと訴えている。この頃はまだ母は父や伯母への遠慮もあって十分に洋子を受け止めきれてはいなかったし，洋子自身も家族に対する心理的な葛藤や敵意感情を言語化できるほど十分には，自分自身についてわかってはいなかった。私は洋子に対しても母に対しても「まあ，気長にゆっくりいきましょうよ」と語り，私自身がゆとりをもって接するようにし，母には「今後はもっと荒れることになる

かもしれないが，洋子の成長過程において当然起こることだから，心配せず見守るように」と伝え，洋子には「昔やれなかったことを，今やっているだけのことだから，こんな自分ではだめだとか，悪いことをしているとか思う必要はない」といった形での支持をすることに心がけた。

この頃のもっとも中核的な問題は，バレエに関する葛藤であった。入院間もない頃のように，洋子はもはや「バレエのレッスンが軌道にのっていたところだったのに，家族に引き戻された」とはいうことはなくなっていたが，バレエを続けるかどうするかについて，ひとつの輪の中を堂々巡りをしていた。9月のある日の面接で，洋子は次のように述べた。

「なぜ，こういう形でバレエを終わらなければならなかったのでしょう。一緒にバレエをやっていた人の中には，バレエを途中でやめた人もいます。私もやめるならやめるで自分で区切りをつけたかったのです。それがそうではなくて，病院に来て終止符になってしまいました。自分で自分をセーブできないような人間が，これから社会に出てやっていけるでしょうか」

＜やめた人はそれぞれの理由で判断してやめたんでしょうけど，あなただって今，これからどうしていこうかと自分で考えてるじゃないの？　だからやめていった友達と同じだと思うわ＞

「そうですね。先生は私がいうことをカルテに書いているだけで，考えているのは私なんですね」

洋子は，自分で自分の問題を考えているのだということ，他の人たちと同じであるということを納得し，嬉しそうにうなづいた。しかし，この葛藤はそう簡単には解決にはつながらなかった。10月に入った頃の面接では，洋子は次のように述べている。

「体の調子がよくなって気持がスッキリしてきたら，またバレエのことを思ってしまいます。バレエは私にとってもう過去のものなのか，これからのものなのか。三度目にもう一度，東京でバレエに挑戦しようかとも思います。けれど一方では，もうバレエをやりたくないという気持もあるのです」

＜いろんな気持があるのでしょうね。バレエとのつき合い方はやっぱりあなた自身が決めること。今までのようにプリマをめざすか，趣味としてやるか，またはやめるか，時の経過とともに自然に方向が決まってくるようにも思うけれど＞

「そうですね……」

さらに1カ月たった11月の頃には，洋子は一応は次のような結論を出した。

「退院したら，しばらくは家に居て，仕事を捜します。バレエのことはもう考えていません。夢に出てくるだけです」

その夢についていえば，この頃は飛翔の夢が多かったが，以下にそのいくつかを列挙しておきたい。

【夢11】伯母が現われ，バレエの薬といって何か変なものを飲ませようとする。子どもが飲むと危ない，という。
【夢12】ひとり乗りの飛行機が飛び，それが夜の星空で鳥になり，子どもを産む。
【夢13】黒い鳥の羽根が伸びる。手の平くらいの羽が縦に重なってグングン空高く延びていって，自分の手の中におさまらない。

バレエについては，これよりずっとあとになってからであるが，洋子は次のように語っている。

「バレエで得られる喜び，それは無我の境地に近いものです。身体を限界まで酷使すると，不思議と身体が動くようになり，疲れも感じなくなるのです。こうして自分をコントロールして，どこまでも高く昇っていきたいと思うようになっていましたが，そうして昇っていく時も自分の力以上のものが，働らいているように思いました。今思うと，自分には，テクニックは練習することによって上手にできても，内容とか表現力がなかったんです。素材としての身体にも恵まれていたわけではないし，才能がなかったんでしょうね。今ではだんだん挫折感もうすらいできました」

この11月の頃には，バレエとは一応，訣別しようとしてはいるものの，それでも完全には割り切れてはおらず，ウツウツとした日々の生活の中に，なんとか光明を見い出そうとするかのように，洋子は初めて結婚についての話題を提起してきた。

「東京でのバレエの渦から外へ出て，少し自分を見つめられるようになりました。仕事をしながら結婚も考えるということでよいでしょうか。そういう異性の友達がほしいんです。私はいいなと思っている人がいるんですけど，向こうは何んと思っているのかはっきりしなくて……」

＜どんな人なの？＞

「東京のれい子叔母さんの弟で，東大出の学者でピアニストの人。21歳の時に一度会ったことがあるだけで，顔もはっきり覚えていませんけど，一度会ってピカピカッと通じ合うものがあったんです。それが忘れられなくて，でも，自分からいい出すのは恐いんです。身分が違う……。相手は知識階級です。いっそ，その人が結婚していたら，私も安心して見合いができるのに。今までは恥かしくて先生にいえなかったんです。でも先生にいわないと，空想をふくらませるだけで，現実的なものにしていけないから思い切って話しました。この前の面接で気持が空虚といいましたけど，このことを考えると，少しは希望につながっているように思います」

＜そう。よく話してくれましたね。人を好きになるってすばらしいことね。ところで，あなたは今までにどれくらい恋愛をしたことがあるの？＞

「うまく恋愛できなかったのです。それが病気の部分でもあると思うのです。『ジゼル』というバレエを知っていますか。皇子のアルブレヒトは貴族のマチルダという婚約者がありながら，村娘のジゼルと身分を隠して恋をしたのです。それを知ったジゼルが発狂して死ぬというのが一幕です。アルブレヒトとマチルダは人間世界の形式的な肉体の関係。ジゼルとアルブレヒトは霊的な結合の関係。どうしてジゼルの方を本当は深く愛しているのに，マチルダと結婚しなければならないのかと思い，私はそれを地で行って，バレエの先生と自分は霊的に結ばれている，特別の結びつきがあると思って，結婚を考えたりしたんです」

＜ふーん。それはどんな先生でした？＞

「初めて会った時から，惹かれるものがあったと思います。先生の妻がプリマ・バレリーナで，おふたりの共同の力によって，バレエ団が成り立っているのです。そのバレエの先生は，私がバレエに打ちこんでいた時，熱心に教えて下さいました。でも，私はバレエの物語に入りこんで自分を失い，現実を錯覚してしまいました。伯母をバレエの物語の中に出てくる悪魔だと思い，とてもこの人と一緒に住めないとも思いました。二度目に上京した動機に，この先生にもう一度会いたいという気持がなかったとはいえません。でも今は，バレエの先生より，東京の叔母の弟の方がいいと思っています」

こうした人間関係の話題には，なおまだ現実吟味が欠けてはいたが，私はそうした彼女なりの期待や夢を一応尊重し，感情の拡がりだけは受けとめながら，退院へ向けての現実的な心構えについての話し合いの方に重点をおいて対応していった。

外泊は相変らずであった。しかし，この頃すでに母と洋子の関係は著しく改善されており，洋子は母に「家の食事はバラバラなので，それを母にまとめてもらいたい」などとその家の母親としての役割を期待するようになっていた。佐智も「今までは洋子については，この家の中で誰よりも私が一番よく理解していると思う」と述べ，洋子の期待に応えうるだけの母になっていた。以後に残された課題は，洋子が家に帰って家族とともに実際に生活をやっていくということであった。こうして彼女は12月中旬，第40回面接を入院最後の面接として退院していった。入院時54kgの体重は，この時点で77kgとなっていた。

3　第三期：「居場所づくり　── 家庭の再建── 」（第41回面接から第63回面接まで）

退院後，彼女にとって世界との唯一の接点であり，全存在をかけていたバレエを一応は諦めた結果，彼女はどこにも自分のよすが，居場所を見い出すことができなかった。入院中は退院という当面の目標があった。しかし，それを果たした今，洋子は無気力になっていた。

「家では何かしようという気持がわいてこないし，何をしてよいかわからない。毎日が苦しい。東京でのいいことだけが想い出され，あの頃の生活は充実していたとばかり思います。東京でバレエやってはいけませんか。でも，それは頭の中で思っているだけです。全然家に居るという感じがしない……。寝て意識のない時だけホッとします。漠然として地に足がつかない。毎日，死にたいと思っているんです」

こうして家では，近所に聞こえるのもかまわず大声で泣き叫び，庖丁を捜したりする。また，母や伯母に抱きついて胸と胸をすり合わせたり，一緒に床に入り赤ん坊のようにダーダーと手を取って，あやすことを要求する。かと思うと，いきなり押し倒すなどの乱暴な行為に出たり，さらにはまた風呂に入る母の身体をじっと眺めていたり，すれ違いざまにお尻に触わってきたりして，まるで痴漢のようだと母を嘆かせている。父に対しても，子どものようについてまわって甘え，父の上にかぶさってキスのまねをしながら，みだらなセクシュアルな言葉を吐くといったことがずっと続いている。3月頃になって，やっと「私が今，父母や伯母に甘えたりするのは異常ですね。父にまでベタベタするのは変な感じに見えるかもしれませんが，お母さんにやるのと同じ気持でやっているんですから，大目にみて下さい」と言語化している。とくにこれまで父との関係は，すでに述べた通り，非常

に希薄なものであった。退行したあり方の中で，彼女は幼児期来の父娘関係をやり直そうとしていたかもしれない。また，この夏，洋子は自分の部屋にクーラーのないことを理由に，父母の寝室に自分のふとんを持ち込んで，ふたりの間に寝るようになっていたが，それもまた自分が子供として間に入ることによって，両親を真の夫婦にさせ直そうとしていたということかもしれない。

家にいても間がもたないといって，過食とゴロ寝ばかりしている状態から何とか脱却させたい，と母は兄嫁の父の会社に兄嫁とともに週2日，無給で手伝いにいかせるよう手くばりをした。この仕事はその後，9月に正式な就職が決まるまで約6カ月続けられた。4月のある日，他の用事で仕事を休むのを洋子は母に伝えさせ，しかもそれが当日であったことから，兄嫁は誠意がないと怒りを爆発させた。それは「この家には洋子さんに注意する人がいない」として家全体に向けられたものであった。兄嫁としては姑に頼まれ，洋子の自立の手助けに精いっぱい協力しているのに，当の本人の態度は高慢そのものであると映り，またそれを許している家族が理解できなかった。兄嫁から向けられた怒りに「家族はびっくりし，洋子は目がさめた」という。洋子は私に「はじめて人によって感じ方がいろいろなんだなと思いました」と実感として語ることができた。そして「兄嫁には何をいわれるかと思うと恐い」と兄夫婦の前では，体面を保つのに必死であった。

そんな4月下旬のある日，いつになく明るい表情で来院した洋子は，席につくなり，「けさ4時半頃，夢を見ました」と語った。

【夢14】新幹線の車内に黒人が乗っていて，その黒人の子どもが暗やみの中にさまよっている。私と子どもがだぶっている。どんどん行くと，扉が開いて光がさし込んで，その先に魔法使いのおばあさんがいて，その背後にバレエの男の先生がいる。魔法使いのおばあさんに飛びつかれるが，おばあさんは白骨になって倒れてしまう。

＜その先生というのは，あなたが好きだった先生ですね＞

「夢の中で先生が『思っていてくれて嬉しい』といいました。本当にそばに先生がいるのではないかと思ったほどです。あの頃，私はバレエに打ち込んでいたし，先生も懸命に教えてくれました。先生にも私の思いは通じていたと思います」

＜そういう気持をお友達同士で話題にしたりしなかったの＞

「今ならおしゃべりすると思いますが，その時は追いつめられた気持を誰に相談してよいかわからなかったんです。それにしても，こんな夢を見るなんて，バレエを心の中のどこかで過去のことではなく，何とかなるとでも思っているのかしら，今は東京でバレエをしようとか，趣味ででもやろうとは思っていません。青春時代の想い出としてのバレエです。よくあんな同じようなことをやっていたと思います。今ではもう別世界です」

さらに当時の病的体験についても，彼女は思い出しながら語っていった。

「歌舞伎役者の坂東玉三郎や音楽家の芥川也寸志，団伊玖磨とも芸術家同士，超自然的な信仰で結ばれていて，知り合いのように思えました。入院中は中庭でバレーボールをやっていた患者さんがカラヤンに見えたりしました。また，東京のれい子叔母さんの弟と結婚したいといったことも，今思えば，人物もたしかに知らず，ただ東大出，学者，ピアニスト，というだけで超自然的な信仰によって結ばれていると思ったのです。入院前は，やっぱりおかしかったと思います。同じところをみつめて何も話さずにじっとしていると，ひとが喋っていることは，みんな自分に向けて喋っているように思えました。19××年（と彼女はつねに西暦で語った）の6月6日，私は22歳ではじめて教会へ行った時のことを覚えていますが，神様から呼ばれているような気がしたのです。これも病気と関係があるのではないでしょうか。自分では病気ではないと思っていたのに，病気でした。また空想の中に入り込みそうで心配なんです。今まで何も自分でやってきませんでしたから，現実的になれないのでしょうか」

＜これからはあなたはひとりではないのだから，少しも心配する必要はないでしょう。一生懸命やってきたのに，具体的な体験が少ないと思うのなら，これからやっていけばいいと思うわ＞

彼女は「退窟と孤独，どう形容してよいか，とにかく空虚，消滅した方がよい，また明日が来るからいやだ，生きているという気がしない，先は暗く途中がなくてすぐ死があるみたいだ」と述べながらも，5月下旬の頃には，髪を切り，はじめてパーマをかけて化粧もするようになり，女らしく装うのが嬉しいといった様子であった。また周囲にすすめられ，本人はいやいやながらではあったが，スカートを縫ったり，手芸をしたりして出来上ったいくつかの作品を私に見せてくれるのだった。

そんな経過の中で「何が何でも仕事をしたいという気持でもないが，やることをやっていかないと，病院にく

るたびに院長先生（主治医）にいわれてしまうに決まっている。やっぱり自分で何でも動かないとだめですね」と語っていた彼女は書店の求人を見つけ，9月には正式入社した。当初，彼女は「ただ立っているだけの店員にはなりたくない」と意欲を示していたが，1カ月後には初給料の明細を私に示しながら，「こんなに出してもらっているのだから，責任を感じました」と述べつつ，表情をくもらせた。

「毎日の生活はこなせていますが，希望がないから意欲がわきません……。働いていても終わりがありません。未来がないのに，なぜこんなにまでして働かなければならないのでしょう」

＜それでも毎日，一日も休まずに通っているね＞

「家に居ると，ダラダラして食べるだけになってしまう……。それはもっと恐ろしいから，いやな中でもいい方を選んでいるだけです」

＜もうこれ以上は無理と思ったら，パートにでもかえてもらったらいいね＞

「でも，それでは一人前でありたいという自分の気持が許さない。仕事をやめる気はありません」

それから1カ月たった11月上旬。彼女は生き生きとした晴れやかな表情で現われ，「今日はお話することがあります」と用意してきたように語り始めた。

「今までバレエを軸に生きてきましたけど，こなごなに砕かれ無になってしまいました。最初はどのように進んでよいかわからず，ブラブラしていましたが，こんな生活ではだめだと勤めるようになりました。そうして今，何にもなくなってから出てきたことが，東京にある神学校に行くことです。もっと向上したい。4年間，東京へ行って神学を勉強したいと思うんです」

＜伝道師になるための学校？＞

「伝道師になる気持は，まだ固まっていません。とにかく学習意欲がわいてきたんです」

＜今通っている教会の牧師さんに頼んで，個人的に教えを受けるというのはどう？＞

「そういう方法もあったのですね」（とびっくりしたようにいう）

＜バレエが神学校に変わったわけ？＞

「それだけじゃ，しょうがないですね」（と苦笑する）

それから以後，洋子は牧師さんに個人指導を受けたいといい出すことはなかった。この「東京」「神学校」への憧れはやはり，バレエと同じ上昇への志向性のあらわれであったのであろう。しかし，家では家族の説得にはまったく応じず，お手上げであったのだという。さらに1カ月後には次のように語られた。

「よく考えてみたら，私は父と母と子がいる，そういう家に住みたいと思っていました。キリスト教に関心を持ったのも，私は家庭というものに憧れていましたから，神を中心としてまとまっている家族というところに惹かれたのだと思います。バレエで身体を酷使していくところまでいったら，その先何が残るかと小学生の頃から考えていたのを，すごくはっきりと覚えています。本当に狂ったように踊っていました。そうして登りつめて下ってきた時，今まで自分の力だけを頼りに切り開いてきたのが，もう自力ではどうしようもないと思いました。孤独のどん底で本当にひとりだと号泣しました。落ちていく時，――それは今思えば自分から殻に閉じこもっていたのですが――，一緒に沈んでくれるのはバレエの先生だと思いましたけど，もっと下に落ちていく時はひとり，すがるものがほしいと思いました。それは人間ではだめで，人間の心は変わりますけど，普遍的，恒常的な何か変わらないものがほしかったのです。雲がワーッと覆ってくるような感じでした。小さい時，なんでもつねに一番でよくできたから自分のために，地球がまわっていると思うくらいでした。私はいったい何でしょう。どうしてこんなにわからなくなるのでしょう」

この時期は，洋子が家族の中での居場所づくりをしながら，家庭の再建を目指そうとした段階であったといってよいであろう。洋子はさまざまな問題行動を呈したが，それはこの歪んだ家族関係に向けられた問題提起の意味をもつものであった。これらの異議申し立てを，とりわけ佐智はしっかりと受けとめることができるようになっていた。そうして家族のそれぞれも次々に分化した正当な役割が取れるようになっていった（この点については，すでに前論文で報告した通りである）。

こうした家族の変化の中で，洋子は入院前の状態像についてふり返り，かなり適確な自己把握が可能となっていた。あと残された問題は「上昇と落下」の垂直軸の志向性にかわって，というよりより正確には，その志向性にふさわしい，水平軸の方向性を，いいかえれば，大地に立脚した生活感覚と生活経験を，どう身につけていくかという課題であった。

4　第四期：「大空への飛翔から大地の上での歩みへ」（第64回面接から第73回面接まで）

12月下旬の面接では，洋子は夢の話題から語りはじめ

た。「先生に会いにくる日はいつも〝聖なる夢〟を見るんです。今まで好きになった男性は3人います。バレエの先生と叔母の弟と，英国ロイヤルバレエから来たエリール先生です。そのエリール先生の指導を受けてはじめて，私は花開いたという感じをもっているんですけど，今日はそのエリール先生の夢を見たのです」

【夢15】映画（私は小さい頃から外国映画が好きでしたが）に出てくるようなヨーロッパ風の家の白い壁，テーブルがあって，年のいったシスターの膝に伏せるようにして，エリールさんが泣いている。シスターは「肉体は丈夫でも，1年たち2年たち，3年たち5年すると，人の心は変化するものですよ」と話している。

夢から思い出したように洋子は続けた。

「今日のような満足した夢をみると，本当に嬉しい。私は今，治った，というより前よりも成長したと感じます。東京にいる時は，自分で生活しているという感じではなくて，ただレッスンをしているだけでした。

高校2年からバレエに進もうと決めていたんです。東京のバイオリンをやるれい子叔母さんを一番尊敬していました。れい子叔母さんが『若い時に懸命にやらないようではだめだ』と励ましてくれたので，期待にかなおうと無理したところがあります。18歳の時から今まで，私はれい子叔母さん以外の人の意見は聞けなかったのです。母とか伯母のような「生活者」の意見は聞けませんでした。れい子叔母さんは，世間なみの雑談などはせず，自分を高めていくような生き方をしている人で，私も合理的で無駄なく，スケジュールがしっかり決まっているような生活がしたいと思いました。れい子叔母さんはバイオリニストとして本格的にやろうと思っていたのに，叔父と結婚してしまい，10年悩んだといっていました。そして自律神経失調症とかで，病院へ通ったりしていました。れい子叔母さんの家庭は，私にとって理想の家に見えました。でも，よく聞くと，叔父との間には深い溝があるらしくて，そのことについて母に相談の電話をよこしたりしていました。今になってみると，バレエは本当に自分でやりたくてやっているのではなく，やらなくちゃいけないという気持だけで動いていたみたいです」

洋子は青年期に入ると，伯母を「何でも必要以上にやってくれる，私の中まで侵入してくる，大雑把で細かな心のヒダまで通じない人」と思うようになっていたが，正面から対抗できないままに上京した。いわゆるシゾイド・タイプのれい子を理想の女性としてアイデンティファイし，彼女に認められたいがため，さらにバレエに打ち込んだ。母によると，洋子はれい子を「滅茶苦茶に崇拝し」心の寄りどころとしていたという。しかし，れい子の方は「あなたは私の家族ではないのだから」と一線を引いて，それ以上には寄せつけなかったらしい。かつて入院するまでの洋子は高尚な話ばかりで，母が何を話しても低俗と決めつけて軽蔑し，自分は一段高い所にいて母と口をきくことさえなかったのだった。ただただ清く美しくありたいということから自分の「生理」のことをいわれただけで怒り出したりしたともいう。

3月上旬の面接で洋子は生前，実母が父に語ったという話を報告してきた。

「母はこのように話したのだそうです。『動物は電車がきたら，そのまま線路に向かって走ることしか知らない，でも人間は危険が迫ったら横にそれることを知っている』と。私は今までバーッとつっ走ってきましたけど，もうこういうことがわかれば，心が楽です。何が何でもバレエと思わず，バレエがだめなら横にそれて，別の道を歩けばよい，実母が生きていたら，そう助言してくれたと思います。でも，私はもうすでに電車にぶつかってしまったんですね……」（と淋しそうに微笑む。しかし，そのあとで彼女は次のように続けた）

「春の陽射しとともに，気持が弾むんです。畦道を歩いていると，また土が生き返ってきたと思えて，花の咲く前は春のいぶきを感じます。仕事に行くのも楽しいし，10時と3時のコーヒー・タイムの同僚とのちょっとしたお喋りが楽しいんです。今までのように人を表面的に見て決めつけたりしないで，どんな人の中にも未知数の部分があるんだなと思うと，人好きになって井戸端会議もいやではなくなりました。ただ，この人はどういう人かなというのがわからなくて，困ることはありますけど」

＜その感じは大事ね。そういう感覚をこれからみがいていくことが大切だと思う＞

私は洋子のこうした感覚の動きを生活に根ざした確かな実感として受け取った。しかしながら，このまま展開していくのではないかという私の希望的観測がゆすぶられることもないではなかった。その次の回に，洋子は暗い表情で訴えるのだった。

「芥川也寸志の夢を二度みて，過去のことを思い出しました。『バレエ団をやめます』といいにいった帰り，途中の階段のところで彼に会いました。電車に乗ったら，向かい側にいた時もあります。郷里に帰ってからも，車

に乗っているのを見かけたこともありました。也寸志の父の龍之助は文学者で自殺してますから，印象が強烈でテレビを見ていると，何か私に許えかけているように思うのです。この間も，テレビで最後に也寸志の微笑みかける顔が大きく映ったら，やっぱり私を知っていると思ってしまいました。本当は知り合いじゃないですよね」

（そう洋子はオズオズと私に尋ねるのだった。私は「もちろん，そうよ」と強く否定した。彼女は心もとなげにつぶやいた）

「色々なことがわからない……。神があるのかないのか，無くては生きられない気もするし……。出家してみたい。シスターとか尼さんになりたい。今の生活はいや。今はただ仕事があるから出かけ，家があるから帰る，希望もないのになぜこんなにまで苦労して働らかなければならないのでしょうか。普通の人のように生活していけるでしょうか。母が生きのびてきた姿をみていないから生き方がわからない。母が29歳で自殺してとぎれてしまっている。私は今27歳。将来のお手本がない。そういう意味で未来がない。景色を見ても，ただ景色があるだけの感じです」

この頃はとくに，このような軽い非現実感や離人感，あるいはさらに「どうして皆のように普通に生活できないのでしょう」「生きているのが不思議」「地球に立っているのが不思議」といった自明性の喪失にまつわる訴えが目立っていた。私は「そこが辛いところね」「あなたにとっては，当然でしょうね」などと，できるだけ彼女の気持が理解，了解できていることを伝え，支持的に受容的であろうとした。

この頃，洋子の元気のない様子をみて不憫に思った伯母は，昔からの知り合いの34歳の青年を洋子に引き合わせた。

「良ちゃんに再会しました。良ちゃんとは，私が小学校6年生の時に会って以来，16年間会っていませんでした。良ちゃんの方は私のことをどう思っているかわかりませんけど，私はこれからの人として考えています。手紙の交換をしたり，時々会えるなら嬉しい。良ちゃんは私の生母を知っている人です。神は私に必要ですが，教会とは当分の間決別し，良ちゃんの方にいくことによって巾を持ちたいと思います。今は，教会での日曜日の話を生活の中に生かしていけないし，人から言われて動いている自分が嫌です。今，自分がないと感じるものですから，教会にいかないということで自己主張しているんです。先生は白紙で，このことはこういうものだ，というのがないからいいんです。教会では，こういうことをいうとまずい，というのがありますから」

5月には書店組合から一泊で温泉に出かけたが，彼女は仲間たちとそれぞれの恋人の話をし合ったという。洋子も「良ちゃん」の写真を持っていって見せたりし，若い女性たちの中に溶け込んで，雑談を楽しんできた。日常的，世俗的なことの大嫌いだった洋子が「人間に対する考えが楽になりました，人生はもっと豊かで豊富なのかな」と語るまでになっていた。

そして1カ月後，洋子は「良ちゃん」に結婚を前提としてつき合ってほしい，と意志表示をしたが，彼は「あなたを見る時，いつも伯母さんが一緒にいる，結婚の対象として考えていない」と断わっている。それに対して洋子は「私も結婚したいというより，今の生活から逃れたいという気持の方が先行していたようです，また元に戻っただけのことです」とさしたる動揺は見せなかった。

しかしながら，やはり家では幼児が泣き顔を見せる時のような顔をして「もの足りない，寝るしかない，意欲がでない」といって休日には何もせず，この世的なことには一切，かかわろうとしないという面もまだ残っていた。

そこで，現実原則に沿った治療者役割を分担している主治医は「次回来院する時に，自分で収穫したジャガ芋を持ってきてほしい」と注文をつけた。7月中旬にジャガ芋を下げて現われた彼女は私の顔を見るなり，「私，しんどいんです，生活は苦しいです」と訴えるようにいった。

＜何があったの？＞

「芋ほりをしながら，土について考えていました。蒸し暑いし，蚊はいるし，ミミズはいるし，変な虫は出てくるし……。土といえば何年か前の肥えがたまっているような土でした。こげ茶のきれいな土から豊かな芋が出てくると思っていたけど，全然違いました。気持がフワフワして幽霊みたいなのに，今日病院にくる途中，下げているジャガ芋の重みで地面に足がドシッとついて，ノッシ，ノッシと地球をふみしめているような感じがしました。

＜そう，だんだんジャガ芋を下げなくても，しっかり地に足がついていると感じられるようになると思うわ＞

「そしたら，生きているのが不思議に思わなくなりますか」

＜今でもかなり生きていると実感できる時もあるのだし，いずれはもっとそうなっていくでしょう＞

「本当ですか」（と嬉しそうに弾んだ声でいう）「今月の下旬に中学校の同窓会があるんです。女の子より仲が

良くて，成績を見せ合った男子がふたりいるので，今どうしているかなあと会うのを楽しみにしています。職場の同僚には同級生たちがよく訪ねてくるんです。私もその同窓会の席で，みんなに『あそこの本屋にいるからきてね』といってみようかと思っているんです」

以前，勤め始めた頃は一介の本屋の店員でしかないことを恥じ，知った人がくるとこっそり隠れていた洋子だった。

ある日，私は仕事を終えたあと，洋子の勤める本屋に立ち寄ってみた。そこで私の見たのは，バイトの女店員にてきぱきと指示を与え，「まだ本はこないのか」などとどなる客に，落ち着いてにこやかに応待している洋子の姿だった。

Ⅵ　考　　察

1　基本的存在様式について

「人間学的均衡」(anthropologische Proportion) という概念のもとで，Binswanger (1949) は人間的現存在における「高さ」と「広さ」の間の割合いを問題にしている。ここでいう「高さ」とは，自己実現，自己獲得，あるいは成熟，達成，精神性への意味方向のことであり，「広さ」とは，経験的次元における生活一般，すなわち日常性，平常性，世俗性，物質性への意味方向のことである。簡単にいって，垂直軸の方向は自己との関係を，水平軸は他者と世界との関係をあらわしているといってよいであろう。従って，垂直軸には自主性と自立性，水平軸には自明性を対応させることができる。

この両方向性は，それぞれの人間実存においては全体として均衡がとれている必要がある。この均衡が崩れた状態は，Binswanger が「Verstiegenheit」と呼んだ事態において，ひとつの特徴的なありようが顕著にあらわれてくる。Verstiegenheit というのは，横への広がり，つまり経験や見通しにふさわしい水準以上に，より高くに昇った状態にあることを意味している。すなわち，登りそこなっているのであるが，この言葉はもともと，登山やロック・クライミングなどで，無理に登りすぎて足場を失ない，降りるに降りれなくなった状態をさしており，ここから一般に「途方もない，無理な，身のほどを忘れて極端に走る，思いあがる」といった意味に用いられている。このような「広がり」への方向性を犠牲にして，不つりあいにもっぱら「高さ」のみが強調されたあり方には，情態性としては，つねに落下への「不安」がつきまとう。Verstiegenheit においては，従って「昇る」と「落ちる」のふたつの動詞が，特別の重要性をもってくることになる。

Binswanger は，この Verstiegenheit を，分裂病者の失敗された三つの現存在形式の筆頭にあげており，もっとも分裂病的な存在様態として見なしている。それは，精神分裂病の基礎障害たる「自然な経験の一貫性の解体」に対する「仮想の支え」としての「非現実的理想形成」ということであり，その意味での「現実遊離，現実乖離」のことである。

Binswanger においては，この人間学的均衡はもっぱら「高さ」と「広さ」との，それもかなり静的な比率が，つまり均衡がとれているかどうかということだけが問題にされていたが，Blankenburg は「〝人間学的均衡〟という概念の基本的諸問題」という論文 (1972) の中で，この Binswanger の着眼について，人間学特有の諸次元を把握するための有用な「要請」概念として高く評価し，「均衡性」理念の背景を周到に論じた上で，これをさらに明細化し展開させうる可能性について述べている。たとえば，広がりにおける「時間」の問題，つまり「前へ」と「後ろへ」の方向性の問題，垂直軸における「高さ」だけではなく「深さ」への視点，さらには空間的比喩だけにとどまらないで，さまざまな現存在の構成契機，とりわけ自明性と非自明性というそれを「均衡」概念に応用しうること等々として，広範な展開可能性の方向が示されているが，中でも次の指摘はもっとも重要である。

「自己化（高みへと昇ること）と，世界化（広がりの中へと歩むこと）は，ひとつの弁証法的展開にとってのふたつの契機である」

すなわち，この両方向性の均衡はその都度，人により場合により，時によってさまざまでありうるのであり，しかも，両方向性は無関係ではなく，つねに力動的な相互拮抗関係のうちにあるということである。人は経験的世界の平面的な広がりの中へとどんどん拡張し，できるだけ大きな伝達可能性への方向に向かう努力をしつつ，自己への変わることなき高い要求水準を維持し続けることはやっかいであるし，容赦なく一層の高みへと到ろうとする努力やえぐるような深い洞察力は，それだけ経験の豊富さという点では不十分とならざるをえないし，同時に共同世界との交流のかけ橋を断絶させる危険をもたらすことになる。しかしながら，真の創造者や黙想者は，環境世界の気を散らす広がりからは身をとささねばならないし，逆に「世俗的なひと」は，いつも浅薄さ，つまり表面性へと「頽落」しないでいることは難しい。とはいえ，現存在の高みへの発展と広がりへの発展は，決して相互排除的なのではない。むしろそれぞれは，相互に相手を必要としている。それにもかかわらず，両者

は拮抗関係にあり，その都度の統一は「緊張ある調和」としてあらわれているのである。

こうした拮抗関係が，「緊張ある調和」として弁証法的に展開しないで，両方向性へのいわば矛盾が硬化し，破綻して不均衡に陥ったあり方が，分裂病的存在様式なのだということができよう。その際，すでにふれたように，Binswanger は「高さ」と「広さ」の不均衡に，Blankenburg は「自明性」と「非自明性」の不均衡にもっぱら焦点を当てているが，このことには彼らのそれぞれの症例がよく対応している。Binswanger の症例，エレン・ウエストは身体を捨てて空気の精の世界へと自己投企しようとして，世界は狭隘化し，上昇と落下の垂直軸の方向性だけが不つりあいに強調されたのであったし，世界に根ざし，住まうことができず，「普通の人と同じではない」と訴えた Blankenburg の症例，アンネ・ラウにおいては，水平軸の方向への親しめなさが前景化されていた。いずれにしても，日常的経験の「立場」が弱いということ，日常的自明性のうちに住みにくいということ，いいかえれば「世界内存在」が成立していないということが，基礎にある。Blankenburg は，まさにこのような世界に「親しんでいないこと」こそが，分裂病性疎外の本質に他ならないといいきっている。

ここまで述べてくれば，われわれの症例，洋子のありようもまた，上の記述に逐一，照合してみるまでもなく，すでに明白であろう。ひとことでいえば，洋子もまた，アンネと同様に世界に住まうことに失敗しており，エレンと同じように，天空高く駆け上ろうとしていた。ここには容易に， verstiegen な不均衡を見いだすことができる。小さい頃から洋子は，特別な存在として育てられ，何かにつけて一番であり，つねに弱音を吐かず孤高を持し，バレエによって「どこまでも高く昇っていこう」とした。このことは夢において端的に示されている。夢1，11，12，13においては，上昇への志向性と不安が，夢2，3，4，5，6，7，8，9，10には水平の方向に住まいえない不全感が表現されている。トイレと下着の主題も，日常的自明性の文脈において理解されうるであろう。

エレン・ウエストは，やせ症の状態像をとることによって，身体を捨てさろうとする絶望的な努力をしたのであったが，洋子はこれに対して，バレエで身体を酷使することによって，つまり身体を利用することによって，天空高く舞いあがろうとした。ここで想いだされるのは，29歳で分裂病を発病したバレエの天才，ニジンスキーのことである。Colin Wilson (1956) は，このニジンスキーについて次のように述べている。

「……ニジンスキーの王国は身体であった。彼の踊りを見た人びとは，自分の演じる役そのものになりきる異常な能力がニジンスキーにあったことを認めている。『シェヘラザード』の黒人を演じようと，『ペトルーシュカ』の人形になろうと，『ジゼル』の王子を踊ろうと，すべて役柄になりきったのである。修練によって，彼は意のままに自己を放棄する力を習得した。それは，いいかえれば，自己の一部分を拡大し，他の部分を縮少して，完全に新しい人格に生まれかわったような錯覚を与える力であるが，まさしくこの力こそ，彼の舞踏において神秘的に強烈な自己放棄となり，ときおり聖書の法悦境を彼に垣間見せた力であった」（P 106）

「……『私は肉体に宿った神である』……踊りの最中に彼は幾度となくこの悟りと，この自己超越を感じ，……この力を見て，彼は知ったのだ……『私は神だ，私は神なのだ』と」（P 102）

Wilson は，ニジンスキーの発病の契機を，このような超越的自己表現としてのバレエができなくなったことのうちに見ているが，洋子の例から見ても，それは必ずしも納得しがたい。「世間に対してまったくの無防備の状態にあった」ニジンスキーは，現実に踊りの場を喪失する以前に，バレエ，あるいは芸術という現実的共同世界のうちに住まうこと自体にすでに破綻をきたしていたからである。ここでもその Verstiegenheit は明白となっている。

洋子の場合と同様，身体性がもつ「高さ」と「広がり」への両方向に向かいうる可能性の問題は，あまりに深遠すぎて，今回はそこに立ちいる余裕はないが，いずれ周到に考察される必要がある。

このような分裂病に特異的な本質的存在様態の問題はこれくらいにして，次には洋子における心理療法上の諸問題に関する考察に移ることにしよう。

2　心理療法論について

洋子の入院中の最初の段階では，まず「家」の意味，あるいは家族にまつわる混乱について語られている。まずは理想化され同一化された生母への想いが，「生母さえ生きていてくれたら，私はこんな風になることはなかった」「亡くなった母の問題が片付いていないので，迷ってしまう，どうしてもそこから抜けきれず，前に進むことができない，生きていく自信がない」として述べられる。これとまったく同じ問題として，Blankenburg はアンネに関して次のように述べている。

「彼女の一番の望みとは，まる一日中それこそ朝から晩まで母親といっしょに過ごし，夜は夜で添い寝をして

もらえたらということである。……要するに彼女はこの種の病型の破爪病過程の特徴を如実に示しているような，著しい退行を示していた。……彼女自身の自己は，日常的なものの自明性を与えることも保証することもできないし，ましてや自明性が『ひとりでに』現われてくることはないのである以上，彼女がこの日常的なものの自明性を，支えを与えてくれる人というだけではなく，その支えそのものであるような人から，いわば実質的に支えてもらわなければならないと考えるのも無理はない。この役割をアンネは母親に見てとっていた。……つまりアンネは，自分を赤ん坊同然だと感じていることになる。赤ん坊とは，その生きる支えを，食物とそのまま結びついたいわば実質的な形で，母親の愛情から手に入れているものなのである。……この支え（Halt）の欠如，自立の欠如ということは，まさに破爪病性の本態変化にとって必須の構成的契機とみなすことができよう」（P 157 ～ 159）

「≪……それを私に取り戻してくれることができるのも，お母さんだけです。自然に取り戻してくれるのは，家族というようなものであるはずです≫……それ〔母親像〕は現存在の意味をそのまま具現するような，またそれを伝えてくれるような一つの本質のイメージであり，日常的なものの確かさ，自然さ，判りやすさ，普通さなどを保証し，現存在に自明性を与えてくれるような一つの本質のイメージなのである。この場合，現実の母親との個人的関係がそこに入り込む余地はほとんどない。実際，彼女は母親に対してきわめてきびしく辛辣な非難を浴びせ，ときには母親の価値を全く認めないことすらあった」（P 195）

洋子が生母を理想化し同一化しようとしたことの背景は，上の引用からすでに明白となろう。生母のイメージもまた「後だて」のない洋子にとっての仮想の「支え」なのであった。ここで治療者は，生母と洋子とは別々の人間であることを強調し，生母のイメージを一応，整理させることに成功した。分裂病者の心理療法にとっては，受容的で支持的な構えこそが，もっとも重要であることに変わりはないが，このごく初期の段階で，治療者自身が生母のイメージにかわって，洋子の「支え」となりえたことに，この心理療法がうまく展開した鍵があった。しかし，問題は心理療法の1時間以外の『他の23時間』の方にある。そこで，治療者は継母，佐智を家族面接の場に導入し，真の母―娘関係を成立させようとした。佐智を下女のごとくにして対象外においていた洋子に，治療者は「あなたはお母さんを過少評価している，お母さんのように自分のおかれた立場の中で，よりよく生きようとする姿勢が大事なのだから，お母さんはあなたのよきモデルになる人ですよ」と語りかけ，洋子に欠けている基本的な自己の「支え」としての母親役割を佐智に託そうとしたのであったが，佐智もすでにそれを引き受けるに足るだけの時熟の時を過ごしていた。このような母娘関係の樹立は，佐智が継母であるだけに，近すぎる関係になることなく，比較的容易に可能となった。これが生母であったならば，――洋子の不均衡な現存在様式を可能ならしめたのには，伯母が多くの部分，母親役割を荷なったのではあったが――，事態はもっと複雑に錯綜しこれほどうまくは展開しなかったに違いない。アンネの場合と同様に，母親イメージに向けられた自明性の保証，後だてへの要求とはアンビヴァレントに，現実の母親にははげしい否定的感情もまた向けられたであろうと思われるからである。こうして佐智は家族の中で次第に正当な母親役割がとれるようになり，洋子と各家族成員の間，そして洋子と治療者との間の重要な仲介的，リエゾン的機能をはたすことができるようになっていった。他方で，治療者は洋子にとって圧倒的な近さにあった伯母を遠ざけることができた。このあたりの経過は本論ではかなり省略されざるをえなかったが，ともかくこうした家族状況の変化によって，洋子は次第に各家族成員との間に適切な距離を取ることが可能となった。そうして彼女は自分自身に目を向けはじめ，「自分には何か基本的なものが欠けている」として自己の不全性を直視するようになる。この段階で，治療者がこうした側面をじっくりと傾聴し，洋子が不均衡な存在様式のうちにあることをともに確認していったことは重要である。これによって，洋子はバレエと教会への志向性に自ら疑問を提するようになっていったのであった。

次には，バレエをめぐる葛藤の長い時期が続いているが，この頃から，治療者は洋子の基本的な存在様式の問題よりは，現実的な生活上の問題に焦点を合わせていこうとした。家に居場所を見つけること，普通の生活ができることの重要性を問きながら，洋子の根源的不安と家庭での乱れに対しては，それでいいのだとして保証し，大変な仕事を遂行しようとしているのだからとして肯定的な評価の姿勢を崩さなかった。

そうした中で，洋子には今やはっきりと伯母との距離をとり，両親と3人での家庭を再建しようとする意味方向があらわれてくるようになる（夢5，6，10）。伯母から遠ざかることとまったく対応して，洋子はこれまでの理想的アイデンティティの対象としてのバレエに対しても，距離をおくことができるようになった。夢11は，伯母が与えたバレエは洋子にとっては危険なものなのだ，という意味であろう。夢13はまさに Verstiegenheit そ

のもののイメージ化であるといってよい。もっとあとになっての夢14で，その訣別がはっきりしたものとなる。暗やみの中をさまよう黒人の子ども，これが彼女の自己イメージである。そこに光がさし込んで，魔法使いのおばあさんとバレエの先生がいる。伯母に他ならない魔法使いのおばあさんに飛びつかれるが，おばあさんは白骨になって崩れてしまう——。この時，同時にバレエの世界もまた消滅したことであろう。治療者はここで，バレエの先生の方に話題を向けているが，ここではやはり，おばあさんとバレエの世界の崩壊の方に焦点を当てるべきであったであろう。

その後，この「高さ」への方向性として，東京に出ること，神学校，東大出の叔母の弟との結婚などへの願望が語られたが，これに対して治療者は「それはあなたの問題である」として否定も肯定もせず，彼女の感情だけを尊重して受けとめながら，内容自体に関してはいわば客観的な態度をとり続けた。治療者としては，このあたりの呼吸がもっとも微妙となろう。Verstiegen な理想形成については，治療者がその非現実性を指摘し，批判や説得をしても何ともなるものではない。むしろ，それには彼らの基本障害としての根源的存在不安に対する防衛という重要な意味があるのであるから，それをつき崩すことには重篤な危険がつきまとう。それはそれとして尊重しながら，しかし決して同調することなく，そっと別のことに注意を向けさせていかなければならない。つまり，日常的現実，足下の現実に向けるのである。Blankenburg は「慢性内因性精神病者における仕事の構造について」という論文（1970）の中で，分裂病者の社会復帰に関して注意すべきひとつの点として，次のように述べている。

「これらの患者の大きな特徴である要求水準の高さは——たいていは理想的対象への自己愛的な固着（ヘーフナー）に結びついて——，ある程度まで尊重すべきである。患者の作り上げるイメージについては，たとえそれがもっぱら自分だけのために育てている自己像にすぎなくとも，そのイメージのもつ自我代行的な機能を軽卒に見落としてはならない。学問のまねごとが，より現実に近い庭師の仕事に先んじて選択されるべきであるようなケースもいくつかある。それほどの代償不全に陥る危険なしに，どのくらいの現実原則を患者に要求できるかについて，慎重に考慮せねばならない。以前はこの種の要求をあまりにも控えすぎていたが，現在の社会精神医学ではむしろそれがときに行きすぎる危険がある」

この点，治療者は理想と現実との均衡をうまくとりながら，じっくりと待つことができた。そして洋子は自分の問題は自分で判断すべきことを納得し，バレエと教会に訣別し，仕事に就くようになる。このことは，これまで20数年間にわたって，自らの依りどころとなってきたもっとも中核的な核心を捨てるのであるから，大変な一大転換であったが，このことが可能となるだけの基盤を洋子はまだ決して十分とはいえないまでも，獲得しつつあった。主に佐智の努力によって，洋子が小さい頃から願望していた普通の「家庭的な家庭」が今や，できあがっていた。「住まう」ということは，それのうちに「慣れ親しむ」ということであり，「世界内存在」の「内」（in ）として，世界に「親しんである」ことを可能にしているきわめて重要な人間学的契機である。世界に親しみうることの原初的経験はまず，「家庭」にある。洋子はまだ完全には，この家庭のうちに安住できてはいないが，次第に居場所を見いだしつつあることはたしかである。

その中で，佐智は洋子にコモン・センスや「共通感覚」を与えている。「洋子は当たり前のことがわかっていないから」と佐智は洋子に，「こういう時には〝ご免なさい〟と，こういう時には〝ありがとう〟というものなのよ」と，ひとつひとつ手をとるように教えていった。この段階では，治療場面でも，こうした共通感覚をみがくこと，あるいは日常生活の何げない事柄に感情の動きを見いだせるようになるための，大袈裟にいえば「感覚訓練」が重要となる。また，洋子の心理療法過程においては，細かい生活上の指示をだし，現実原則に沿った父親的治療者役割をとった主治医の存在も見逃せない。

そして，洋子は佐智に，はじめて母の日にプレゼントをしたり，ボーナスをもらうと，その一部をわたして，感激する佐智とともに大喜こびしたという。職場でも，洋子は同僚たちと世間話や井戸端会議に興ずることができるようになった。これも他者との共通な体験が可能となったという経験的世界の「広がり」のあらわれである。ここではもうこれ以上，多くを語る必要はないであろう。彼女はこれまでの高みへの飛翔にかわって，はじめて大地の上での「歩み」の一歩を踏みはじめたのである。

最後に，夢15にふれて本論を閉じることにしたい。ヨーロッパ風の家の中で，年のいったシスターの膝に伏せて，バレエのエリール先生が泣いている。年のいったシスターとは治療者像か，あるいは洋子の，それも未来の自己像であろう。そして，エリール先生もまた，彼女のバレエにアイデンティファイしていた過去の自己像なのであろう。成熟した自己像はかつての自己像にいう。「泣かなくてもいい，人の心は何年もたてば変化するものなのだから」と。まさしく人の心は，変化するものなのであったといわなくてはならない。

文　　献

Binswanger, L. 1949 Vom anthropologischen Sinn der Vertiegenheit. *Nevenarzt* **20, 8.** [Im Straus, E., Zutt, J. (Herausgegeben) 1963 *Die Wahnwelten (Eudogene Psychosen).* 148-154, Akademische Verlag, Frankfurt. に再録]

Binswanger, L. 1957 Schizophrenie. Günther Nesk, Pfullingen. (新海・宮本・木村訳 1960 精神分裂病 I・II みすず書房)

Blankenburg, W. 1970 Zur Leistungsstruktur bei chronischen endogenen Psychosen. *Nervenarzt,* **41**, 577. (木村 敏編, 監訳 1981 分裂病の人間学― ドイツ精神病理学アンソロジー― 医学書院に所収)

Blankenburg, W. 1971 *Der Verlust der natürlichen Selbstverständlichkeit. Ein Beitrag zur psychopathologie symptomarmer Schizophrenien.* Ferdinand Enke, Stuttgart. (木村・岡本・島訳 1978 自明性の喪失 分裂病の現象学 みすず書房)

Blankenburg, W. 1972 Grundsätzliches zur Konzeption einer „anthropologischen Proportion". *Zeitschrift für Klinische psychologie und Psychotherapie,* **20**, 322-333.

藤田早苗 1983 前思春期の心性 ―その危機と成長― 岩波講座・精神の科学 6 サイフサイクル 第4章 岩波書店

服部孝子・森田美弥子 1984 家族への径 ―ある精神分裂病者の家族療法― 村上英治監修 池田豊應ほか編 生きること・かかわること 第4章 名古屋大学出版会

池田豊應 1982 ある青年期危機症例の心理療法過程 村上・池田・渡辺編 心理臨床家 ―病院臨床の実践― 第2章 誠信書房

木村 敏 1975 分裂病の現象学 弘文堂

木村 敏 1981 自己・あいだ・時間 ―現象学的精神病理学― 弘文堂

中井久夫 1984 岩波講座・精神の科学 別巻・諸外国の研究状況と展望 第1章解説 岩波書店.

Wilson, C. 1956 *The outsider.* Victor Gollancz, London. (福田・中村訳 1957 アウトサイダー 紀伊國屋書店)

ABSTRACT

THE PROCESS OF PSYCHOTHERAPY FOR A SCHIZOPHRENIC

Hirokazu IKEDA and Takako HATTORI

The schizophrenia-problem have not been discussed with so much intensity as the arguement on the borderline-problem over this decade. But, the schizophrenia-problem is still a big matter for clinical practices. Though the arguement about this problem reached the peak around Blankenburg's (1971) theory of "the loss of natural self-evidence (der Verlust der natürlichen Selbstverständlichkeit)," it was a discussion only about essential features not about the treatment of schizophrenia. Since then, it have been a challenge for us clinicians how to apply his excellent essential theory to practices.

In this paper, we tried to examine this subject based on a concrete clinical case derived from a 25-year old female schizophrenic named here Yôko. In this case, we recognized the unbalance in "anthropological proportion" (a ratio of the height to the extent in existence) which is the state Binswanger called "Verstiegenheit." In her existence the vertical dimension between rising (ideal) and falling (anxiety) had been disproportionated to the horizontal dimension for walking (experience). Consequently, the world became narrowed and her standpoint in

the living world was undermined. That is, she suffered a failure of being in the world by showing an essential feature of the schizophrenic.

Our theraputic practices for her what were extend over 2 years were based upon the above-stated viewpoint. Our psychotherapy worked and she was almost cured. Through our practices, important points in psychotherapy for schizophrenics were made clear as follows.

1. We, psychotherapists should be supportive with an acceptability. Especially, it is necessary for the therapist to provide a psychological support to the schizophrenics, because they miss completely the bases of their self-existence.

2. We should let all members of their family take appropriate psychological distance.

3. We should encourage them to keep a balance between the vertical and the horizontal dimension as an existential state. Particularly to help them find own place of existence at home and to broaden the experience in the living world are very important.

4. Since "Verstiegenheit" means an unreal ideal-formation and also means a defense, it is rather dangerous for the therapist to breake it down. We ought to leave as it is, and let them direct themselves to the other reality.

5. Sensory training is indispensable. In Particular, there is necessity for us and their family members to teach them a "common sense" in everyday life.